

野外教育施設（東山ビオトープ）を活用した保育者養成に関する研究

山根一晃（初等教育学科・講師）
田川悦子（初等教育学科・准教授）
西島大祐（初等教育学科・講師）
細田成子（非常勤講師）

【研究目的】

子どもたちが自然環境の中で動物や植物に接し、生命力を感じて自然の不思議さ、美しさへの感性を育む幼児期の自然体験は、幼児の精神的な発達に極めて重要である。子ども自身の興味や欲求に基づく直接的で具体的な自然体験を通して、子どもの人間形成の基礎となる豊かな心情・感性を育む指導が保育者に求められている。

しかし、幼稚園教諭あるいは保育士をめざす学生が自然の奥深さを体感し、子どもとともに感動を共有して、子どもの興味・関心を呼び覚ます指導を身につけることが難しくなっている。そこで本研究では、東山ビオトープの自然環境を活用し、将来、幼稚園教諭あるいは保育士として幼児教育に携わる学生が、子どもと一緒に自然の中で体を動かし、生物を育て、遊びを楽しみ、子どもの内面の成長に寄与するにはどのようにしていけばよいか、その指導法を研究することを目的とする。

【研究計画】

- 19年度（1） 研究者と専攻科の学生が東山の自然観察を行い、幼児対象の動植物教材を調査・研究する。
 - （2） 研究者と専攻科の学生が幼稚部生とヤゴ・メダカ遊びを行う。また東山の自然を活用して「やまのびっくりランド」を設営して運営するとともに、幼児への指導計画・指導案を作成、幼児がネイチャーゲームの要素を入れた遊び行い、幼児の遊びを調査・研究する。
 - （3） 教材園で作物（トマト、ラッカセイ、トウモロコシ）を栽培し、幼児対象の作物の教材化研究を行う。
 - （4） 自然体験、自然遊び及びビオトープに関するアンケート（初等教育学科1年生対象）を行う。
 - （5） 「やまのびっくりランド」に関する事前・事後アンケート（専攻科学生対象）を行う。
 - （6） 日本野外教育学会、日本保育学会等で研究成果を発表するとともに、保育者養成及び幼児の野外教育に関する情報を収集・分析する。
- 20年度（1） 19年度の研究結果を検討し、自然観察及びネイチャーゲーム、作物栽培、メダカの飼育・観察、幼児の自然遊びの調査等を行い、幼児への指導法の研究を行う。
 - （2） 19年度の保育者養成及び野外教育等に関する調査・分析を検討し、さらに継続調査・分析、学生へのアンケートを行う。
 - （3） 19年度の幼児への指導計画及び指導案を検討し、幼児への指導計画及び指導案の作成。

- 21年度 (1) 20年度の研究結果を検討し、研究者と実践者（卒業生）及び学生が、自然観察、ネイチャーゲーム、作物栽培、メダカの飼育・観察、幼児の自然遊びの調査等を行い、幼児への指導法を研究する。
- (2) 20年度の保育者養成及び野外教育等に関する調査・分析を検討し、さらに継続調査・分析、学生へのアンケートを行う。
- (3) 20年度の幼児への指導計画及び指導案を検討し、幼児への指導計画及び指導案の作成を行う。

【研究成果】

野外教育施設（東山ビオトープ）にはトビ、コジュケイ等の鳥類、タイワンリスが棲み、ビオトープ池ではメダカやヤゴ等を観察することができる。また四季を通じて多くの草花が見られ、秋には紅葉やドングリ拾い、落ち葉遊び等子どもが自然の中で遊びを楽しむことができる。今、保育者には、幼児が直接的な自然体験活動を行い、豊かな感性を育てることが求められている。幼児の遠足や散歩等の園外保育行事では、公園や野原、里山環境が活用されているが、野外教育施設（東山ビオトープ）は東山の山裾にビオトープ池、池の前には公園や野原を想定する場所があり、保育者をめざす学生が幼児の引率や遊びの指導等野外における保育を学ぶ自然体験型施設である。

そこで、3年計画で東山の自然環境を活用した野外における保育活動に関する研究に取り組んでいる。19年度はその初年度であり、保育者をめざす専攻科の学生（12名）が研究に参加し、下記の通り研究を行った。

- (1) 幼稚部の4才児（46名）が野外教育施設（東山ビオトープ）において野外活動時に使用する教材の調査・研究

里山環境になっている野外教育施設（東山ビオトープ）には、四季を通じて幼児の自然遊びやごっこ遊び等に使える草花や樹木、ヤゴ・メダカ・ダンゴムシ遊び等の教材が豊富である。幼児の年齢に配慮しながら遊びに活用できる教材の調査・研究を行った。

19年度はヤゴやメダカを教材化しヤゴ・メダカ遊び、ドングリや落ち葉を使った遊びにネイチャーゲームの要素を入れた「やまのびっくりランド」の実践に教材を活用した。さらに自然環境や動植物の調査を継続し、幼児が楽しく遊べる教材化に努める。また野外活動について検討を加える。

- (2) 幼稚部の4才児（46名）がビオトープ池のヤゴ・メダカ遊びグループと東山の草花や虫との遊び・トビの巣観察グループの2班に分かれて遊び、幼児が春季に興味・関心をもつ遊びに関する調査・研究を行った。

ヤゴやメダカの採集、幼児の集合やグループ分けと説明、幼児の2班の移動における引率誘導、望遠鏡によるトビの観察、草花や虫遊びへの対応、階段や池付近における安全対策等々多くの課題について検討する。

- (3) 各種の作物が幼稚園や保育所等で栽培されている。子どもは土や水、光、虫の動きや草花の開花等、感覚を刺激するものに強い関心を示す。教材園で作物を栽培し、幼児対象の作物の教材化やそこに集まる昆虫、無機的環境に関する調査・研究を行っている。幼児が栽培する作物としては、1.育てやすい、2.収穫の喜びがある、3.感性を磨き印象に強く残る等であり、19年度はこの条件に合う作物としてトマト、ラッカセイ、トウモロコシを栽培している。学生は今まで作物栽培の機会が少ないため、学生の栽培技術を向上でき、

さらに幼児が作物に興味・関心をもつ教材作物を検討する。また保育所や幼稚園農園の管理・運営の調査等今後の課題についてさらに研究を行う。

- (4) 幼稚園教諭と保育士等をめざしている初等教育学科1年の学生を対象にして自然体験、自然遊び及びビオトープについてのアンケートを実施し、次回の研究成果で報告する予定である。
- (5) 大学キャンパス内ビオトープを活用した保育者養成に関する実践的研究とその課題と題して、野外教育施設（東山ビオトープ）の自然環境を活用した遊びと自然体験活動の課題、今後の取り組み等について日本野外教育学会で報告し、また保育活動や幼児の野外活動に関する情報を収集し検討した。
- (6) 東山に「やまのびっくりランド」（落ち葉のクッション、葉っぱのカーテン、絵の制作、落ち葉トンネル、どんぐりの当て）を設営・運営し、下記の野外における保育活動の調査・研究を行った。
 - a. バスを使った遠足を想定し、図書館前から東山までの幼児の送り迎えの対応。
 幼児が野外教育施設（東山ビオトープ）で、自然遊びに入る前の事前準備や自然遊び後の幼児の集合及び引率誘導に関して、幼児の集合点呼確認や休憩、バスまでの引率誘導等検討する必要がある。
 - b. 階段の引率誘導や幼児の自然遊びの安全と対策。
 野外における遠足や散歩では、幼児の年齢に応じた安全な引率誘導が求められる。
 東山には感覚ガーデンとしての機能をもたせ、感性教育を行うことを想定した施設となっており感性を育てる良い自然環境になっている。しかし視点をかえれば階段や木道とその周辺等に危険箇所があり遊びに夢中になって怪我をすることも予想され、今後、幼児の行動範囲を考えながらさらに安全で楽しく遊びができる指導方法を考えることが必要である。
 - c. 野外教育施設（東山ビオトープ）の利用のしかたと幼児への注意事項の調査・研究。
 自然遊び、集団行動や時間を守ること、動植物を大切にすること等、野外における活動の約束、また幼児が安全に楽しく遊びを行うには施設をどのように活用していけばよいか、施設内の調査・研究と幼児の行動を考慮した注意事項の作成を行った。
 - d. 「やまのびっくりランド」の設営と運営及び指導計画・指導案の作成。
 19年度は落ち葉やドングリ等を活用し、ネイチャーゲームの要素を入れた内容を重視して遊びの運営を行ったところ、幼児は遊びに興味・関心を示した。しかし、秋季の活動だけでなく、19年度作成した指導計画と指導案に検討を加えて、東山の自然環境や動植物を活用した年間の指導計画の作成及び自然遊びの実施指導案の充実を図り、幼児の精神的な発達に寄与する野外活動に関する研究を行う予定である。

謝辞： 鎌倉女子大学幼稚部の皆様から本研究に対するご理解と全面的なご協力をいただき、19年度の研究を行うことができました。心から感謝を申し上げます。

研究協力者：内藤知美・杉本裕子・上田陽子・大津知可（幼稚部）

本研究は、鎌倉女子大学学術研究所助成研究「野外教育施設（東山ビオトープ）を活用した保育者養成に関する研究」の平成19年度中間報告である。